

# 古代軒平瓦にみる凹型台の使用

## —薬師寺と川原寺の事例から—

### 1 はじめに

凹型台は、軒平瓦および平瓦の製作工程において、凹面側の調整時に使用されるものである。平瓦では、飛鳥時代に使用が認められ、奈良時代以降も一定数の事例が認められる。一方で、軒平瓦における凹型台は、中世瓦の特徴として挙げられるものであり<sup>1)</sup>、古代の軒平瓦における凹型台使用の事例は極めて限られているのが現状である。本稿では、比較的まとまった事例である薬師寺と川原寺の資料を紹介するとともに、これらの位置づけについて考察する<sup>2)</sup>。

### 2 平安時代の凹型台使用例

#### (1) 薬師寺

薬師寺の事例は既に山崎信二による指摘があるが<sup>3)</sup>、ここでは従来指摘されていなかった254型式を含めた4型式について報告する（図83・84）。

**238型式** 薬師寺創建瓦の復古文様。顎形態は浅い段顎で顎面の幅は約6.0cm。凸面から顎部裏面にかけて連続する布目痕が残る。顎部から離れた部分には、布目痕ではなく、指オサエによる凹凸が残る。凹面は入念にケズリ・ナデを施しており、布目痕はみられない。布目痕の下に指オサエがみられること、顎部の立ち上がりまで布目が連続し、側面付近には成形台端の痕跡とみられる立ち上がりがあることから、山崎の指摘通り、凸型台上で成形・調整をおこなったのち、布を敷いた凹型台に乗せ換えて凹面の調整をおこなったと考えられる。

**242型式** 薬師寺創建瓦の復古文様。顎形態は段顎で顎面の幅は約7.0cm。凸面はケズリおよびナデで仕上げており、部分的に布目痕が残る。242型式のなかでも、凹型台を使用した個体と使用しなかった個体があることが山崎によって指摘されている。

**244型式** 薬師寺創建瓦の復古文様。顎形態は顎面をもたない曲線顎Ⅰ。顎部裏面に凹型台の圧痕があるが、瓦当面から約5.0cmと約5.5cmのところに認められる。顎部から狭端部にかけて離れ砂が残っており、凹型台使用にともなうものと考えられる。

**254型式** 中心飾りをもつ均整唐草文。顎形態は曲線顎Ⅰ。顎部裏面に凹型台の圧痕が付き、瓦当面から約6.1cmと約7.2cm、そして約14.2cmのところに認められる。顎部から狭端部にかけて部分的に離れ砂が残る。凸面には斜位縄叩きによる調整がおこなわれており、重複関係から縄叩き→離れ砂→凹型台圧痕の順であることがわかる。

#### (2) 川原寺

川原寺の事例は、2023年に筆者が報告しており<sup>4)</sup>、2型式が該当する（図85）。

**761型式** 外区に珠文と×を交互に配する均整唐草文。顎形態は曲線顎Ⅰが主体で、曲線顎Ⅱも認められる。凸面には、縦ケズリをおこなったのち、全面を縄叩きする。凹型台圧痕は、瓦当面から約3.0cmと約6.0cmのところに認められ、縄叩きの痕跡を切っている。

**763型式** 外区に珠文と×を交互に配する均整唐草文。顎形態および凸面調整は761型式と同様である。凹型台圧痕は、瓦当面から約5.2cmのところにあり、離れ砂も認められる。重複関係も761型式と同じである。

### 3 考 察

**凹型台を使用する軒平瓦の年代** 薬師寺の瓦はいずれも天禄4年（973）の火災後、10世紀後半～11世紀初頭の再建工事にともなうものと考えられる。創建期の瓦当文様と顎形態を模倣した復古瓦の一群である。254型式は、薬師寺食堂の調査でまとまって出土しており、寛弘2年（1005）の再建時のものと考えられる<sup>5)</sup>。

川原寺の瓦は10世紀の所産とみられるが、明確な生産時期は不明である。外区に珠文と×を交互に配する文様や、組み合う複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当文様は、11世紀前半の南都の瓦に類似が認められる。

**凹型台の離脱剤** 凹型台の離脱剤として、離れ砂（薬師寺244・254型式、川原寺761・763型式）と布（薬師寺238・242型式）が認められることがわかった。前者は曲線顎Ⅰ主体、後者は段顎である。

**中世瓦的な要素としての凹型台** 今回扱った事例を大別すると、離れ砂を使用する曲線顎と、布を使用する段顎に分けられる。中世軒平瓦の事例は離れ砂を使用する段顎であり、その状況は異なっている。また、薬師寺での凹型台使用は一旦認められなくなり、明確な事例は鎌倉時代以降のものである。川原寺でも瓦生産自体に断絶が

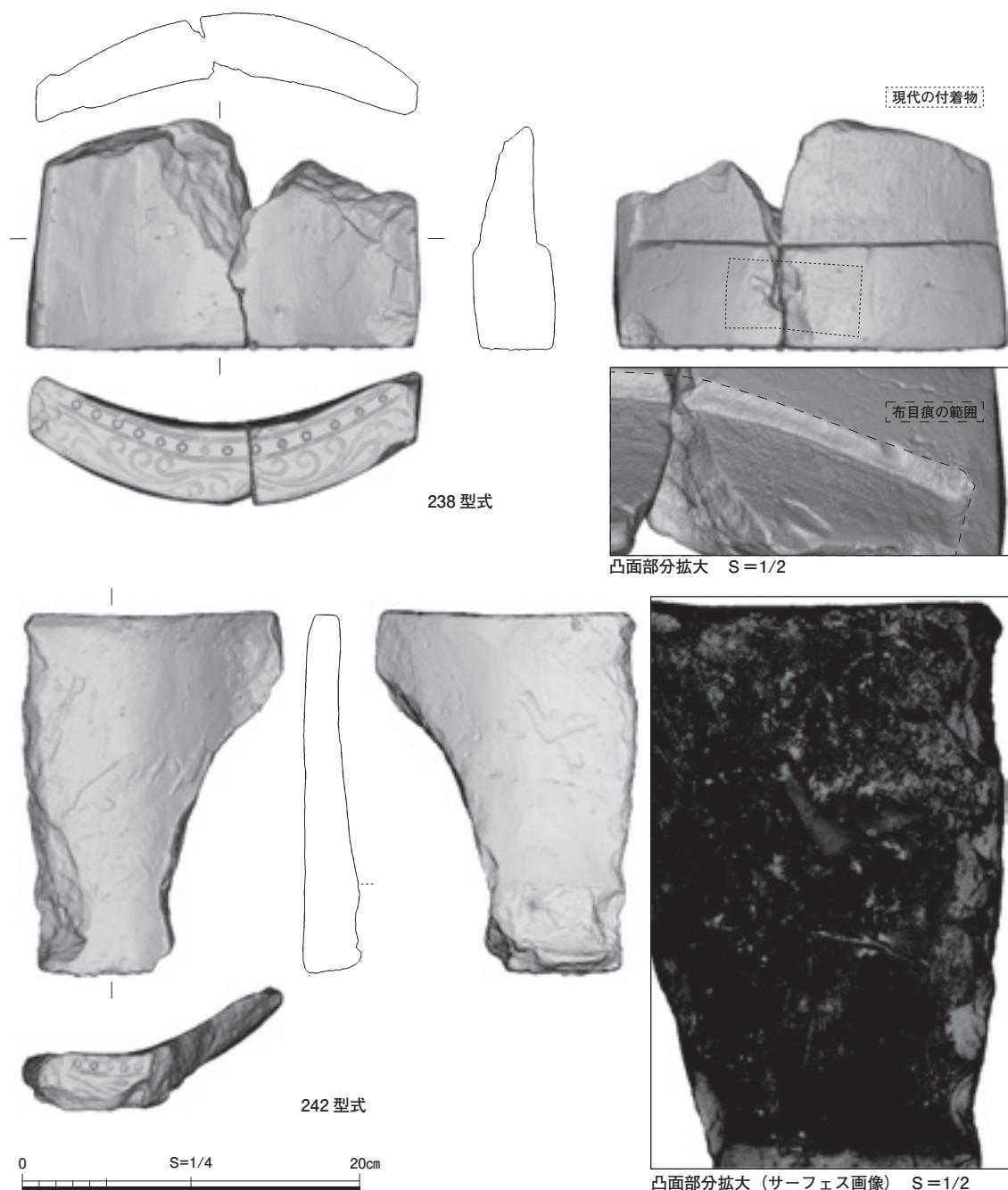


図83 薬師寺出土軒瓦（1）

ある。これらの状況を踏まえると、平安時代、特に10世紀後半～11世紀前半の軒平瓦製作において、凹型台は単発的に使用されたものといえ、それが中世軒平瓦の凹型台との連続性は認めがたい。今後は、中世瓦的な要素が出現した後、どのような過程で定着したのかをあきらかにすることが、大和における中世瓦の成立を考える上で重要になると考える。

本稿はJSPS科研費JP21K20062の成果の一部である。

(田中龍一)

#### 註

- 1) 山崎信二『中世瓦の研究』学報第59冊、2000。
- 2) 三次元計測データの作成にあたっては北野智子氏（奈文研技術補佐員）の助力を得た。
- 3) 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産（再論）」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、2003。
- 4) 田中龍一「平安時代における川原寺の瓦生産－軒平瓦の分析を中心にして」『文化財論叢V』2023。
- 5) 奈文研『薬師寺 旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報I』2013。

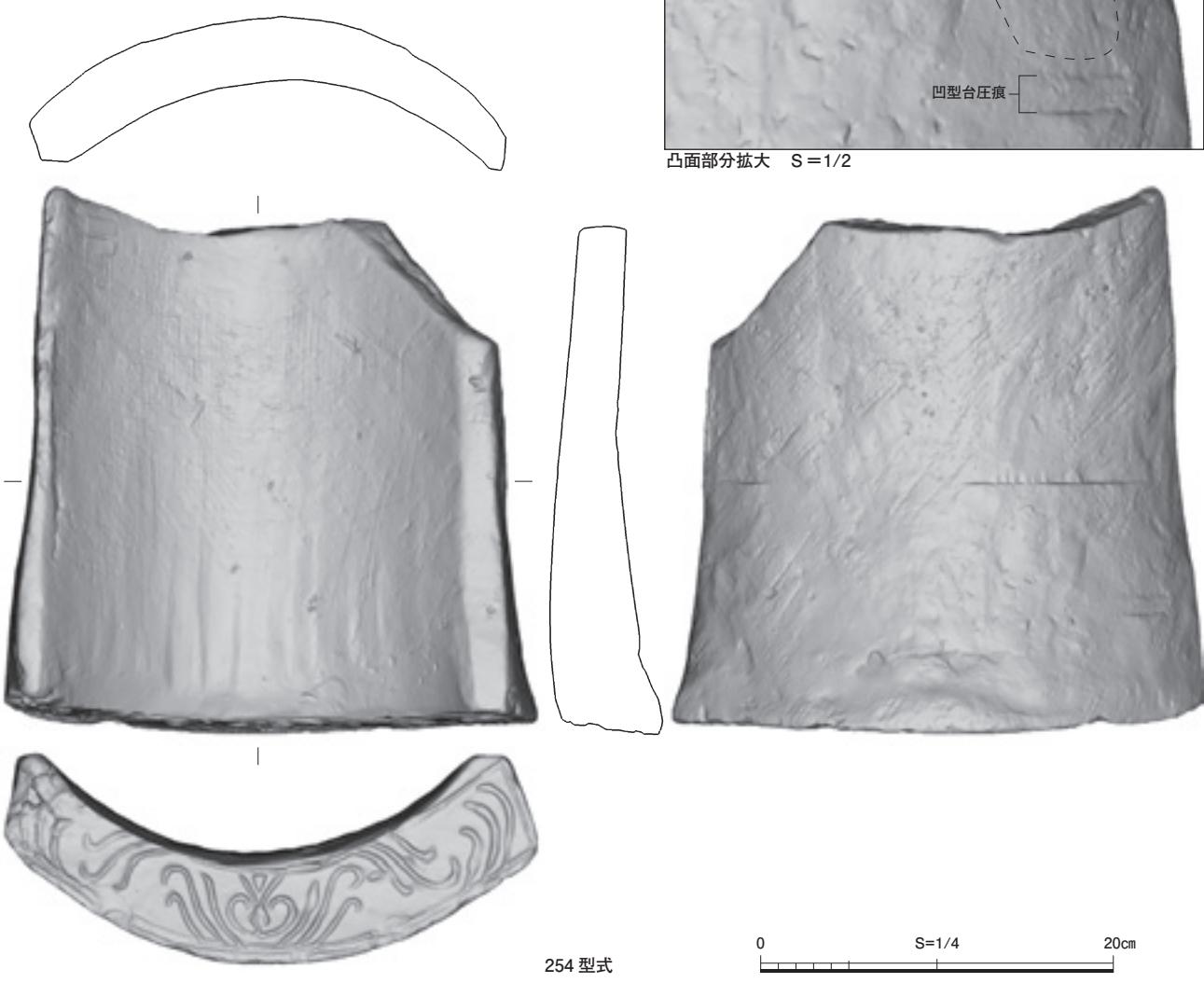
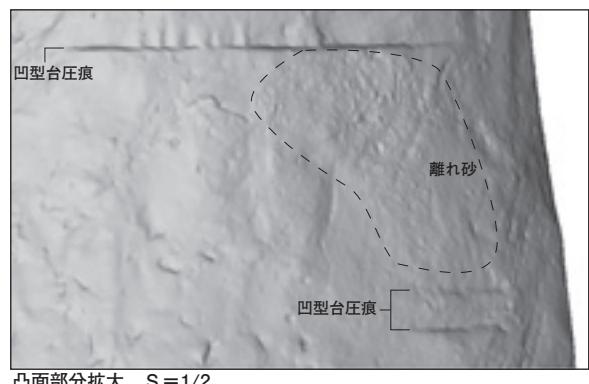
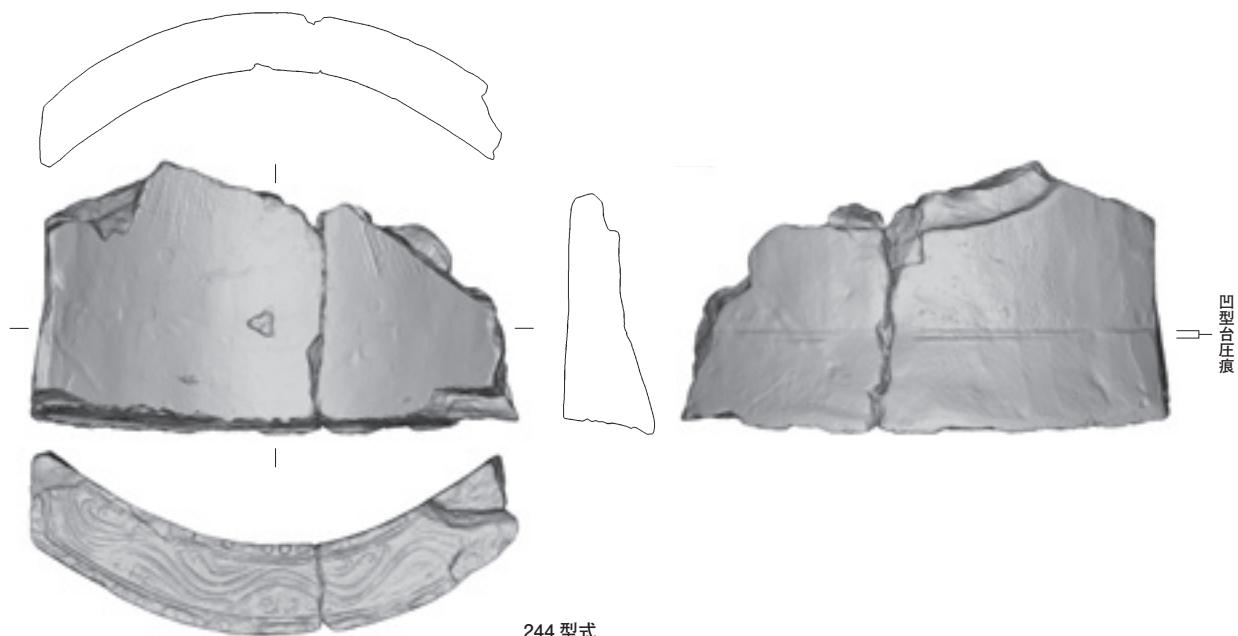
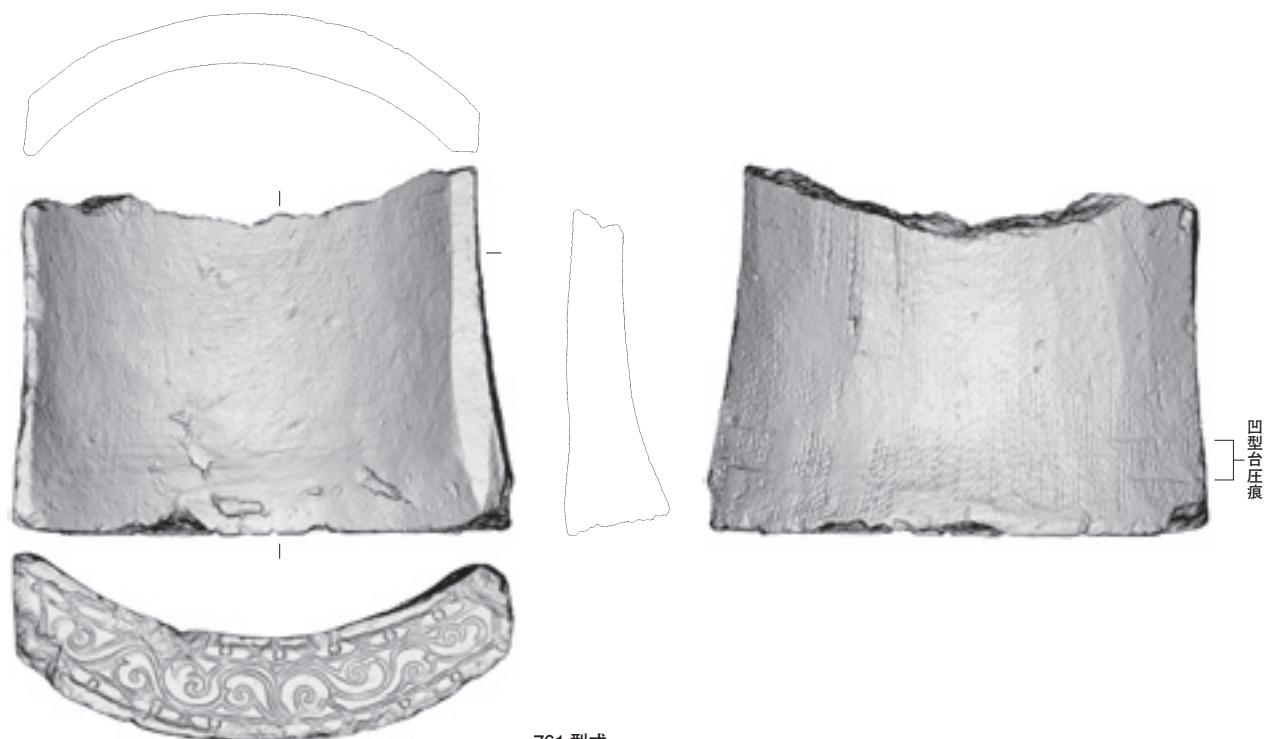
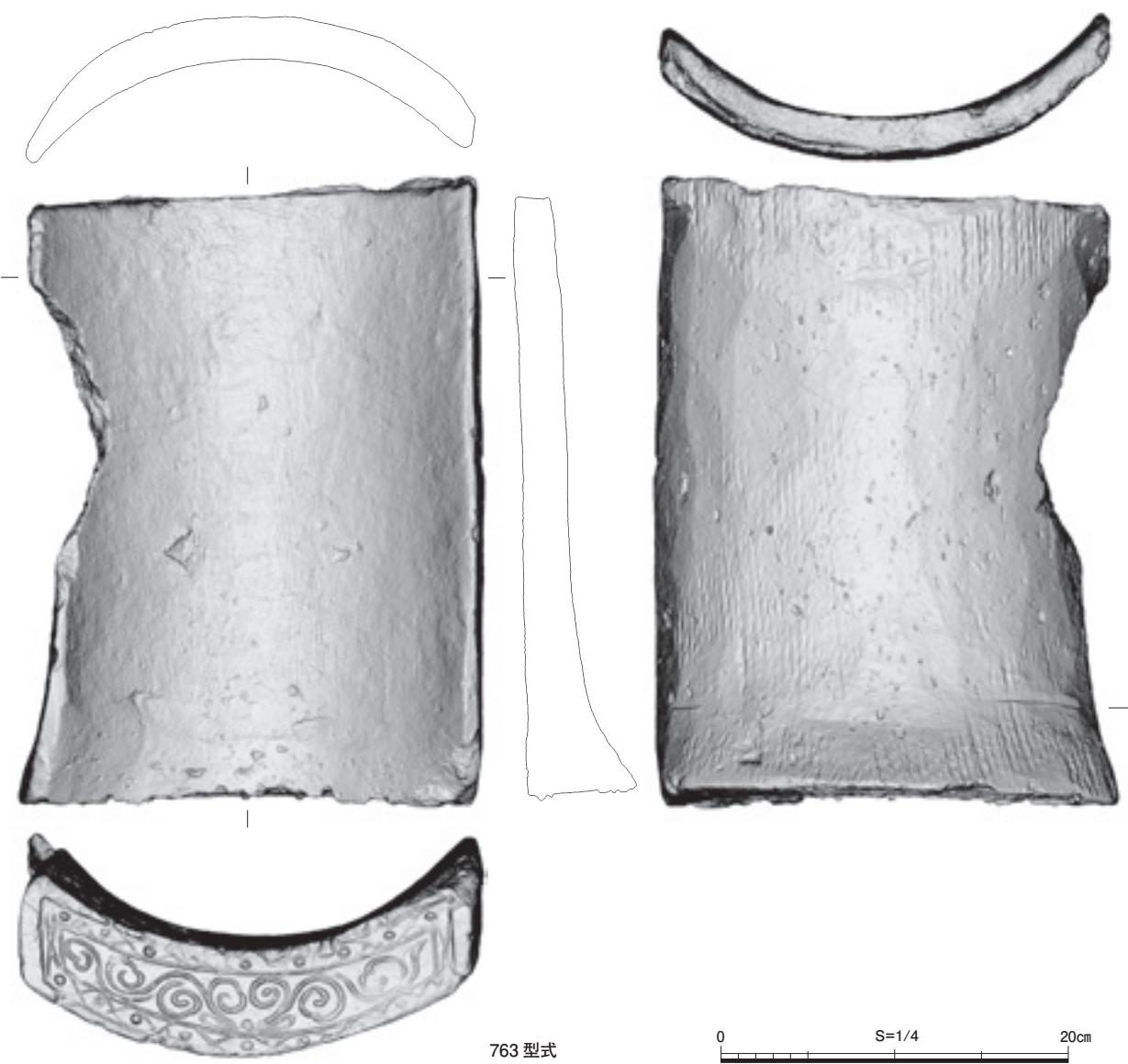


図84 薬師寺出土軒瓦(2)



761 型式

凸型合压痕



763 型式

凸型合压痕

图85 川原寺出土軒瓦

0 S=1/4 20cm